

南方最後の復員船

長崎県島原市 古賀 義章

灼熱の太陽のもと、復員船「輝山丸」は我々の夢と希望を乗せ、紺碧の南シナ海を一路内地へ向けてひた走る。ここにはもう英軍による過酷な作業も無ければ、帰還を待ち望んだ頃の不安や焦燥もない。その上、早口で聞き取りにくい英語や、甲高い華僑の中国語、それに聞きづらい現地の人々のマレー語も聞こえず、まさに日本語一色の世界。当たりまえのことながら、嬉しいような不思議なような気がする。朝から晩まで喰っては寝、喰っては寝と、ついこの間までの重労働に明け暮れた捕虜生活に比べれば、この世の天国である。毎日甲板へ出て船橋の下に貼り出されている航跡地図を眺め、赤道が日増しに北上し日本へ近づくのを確かめる事が楽しみだ。ベトナムの沖合あたりへ来た頃、ふと、戦地へ行く時この辺で敵の潜水艦に襲われ必死で逃げ廻ったにがい思い出が生々しく甦ってきた。同時にすし詰め輸送船で、その上、我々久留米の部隊は、一番下の船艙で茹だるような蒸し暑さに苦しんだ事などが浮かんできた。今の状態とは雲泥の差といえよう。

かれこれ7、8日も過ぎたろうか、船が台湾とフィリッピンとの間のバシー海峡へさしかかった頃から、今まではずっと風だったのに、次第に雲行きが怪しくなり、風が吹き始めてきた。低気圧の接近である。時がたつにつれ、空はまっ黒、雨も烈しく大暴風となり、うねりの高さは10mを越え、7000tの巨体船にもかかわらず木の葉のように揺れる。不安と緊張で皆、顔面蒼白、風は益々猛り狂い、船室の荷物が右へ行き左へ返り、往復運動を繰り返す。あちこちでは仲間達の「ゲーゲー」の吐瀉嘔吐が始まる。時々船が前へつんのめるように船首を突込むと「カラカラカラ」と聞こえるスクリュウの異様な空転音。それに、「ギーッギーッ」と、船体の軋む音が耳をつんざくような響き。全く恐ろしくて生きた心地がしない。まさに修羅場である。このままでは船が危ない。そのうち、船はわざと海水を注入しだした。何でも、船体の重心を下げて安定度を増すための緊急処置であると聞いた。嵐は何日も続き、もう殆ど全員船酔い。ダウンして当たりまえに動けなくなってしまった。用務で甲板へ出向いた時は、命綱に必死でしがみついて進み、ヒヤヒヤ緊張の連続。高い舷側と海面との間が1m程にも縮まり、柄杓で潮水が汲めそうに見える。聞くところによると、航海士は常に船を波に直角になるよう向けねばならないので大変だとの事。そのため正常の4分の1の30分で交代するそうである。交代した人と出会ったが、憔悴してまさに疲労困憊の極という風に見受けられた。何でも、後の方では同乗していた海軍の人達が加勢に入ったそうである。確かこのような状態が一週間ほど続いたろうか、少しおさまった隙をついて、台湾の高雄港へほうほうの状態避難した。これでやっと助かったと、一同安堵の胸を撫でおろした。ところが、もう船には水も食料も使い果たしてしまい、残りは殆どないとの事。早速、高雄の当局へ交渉したところ、南京政府の指令がない限り一粒の米も出せないとの事である。但し水だけは供給すると云うので、水だけでも

らったがその代金がものすごく高くついたという。水だけではどうにもならない。進退きわまったところに、文字どおり助け船が現われた。近海を航行していたアメリカのリバティ船が我が方が出していた救助無電をキャッチし駆けつけてくれた。こちらの船に横付けして、食料を積み込んでくれた時は感謝の念で一杯になった。数日後、天候回復を待って出港し、台湾の南端を廻って太平洋へと出た。とたんにまたしても嵐にあい、止むなく高雄へ引返し待機する事となった。長い間の熱帯での捕虜生活のゆえんであろうか、晩秋の候とはいえ台湾の寒いのには往生した。嵐もおさまり、いよいよ明日再び出港という前日の夕方、珍らしく日本の船が入港してきた。黒い船腹に鮮かな日の丸の印を見た時、まだ日本にこんな立派な船が残っていたのかと珍しさと懐かしさで心が和んだ。

翌日は快晴、いよいよ出港。天候に恵まれて順調に一路北上、もう内地は目前でなんとなく落ち着かない。ところがである。沖縄の沖へさしかかった頃からじわじわと風が吹き始め、次第に強まり、またもや大暴風となり、まさにバシー海峡の時の再現である。二度ある事は三度のたとえどおり、全くついていない。ただ前と違う事は雨が一滴も降らないことである。空は今にも大雨が降りそうな鉛色の曇天で、風だけが烈しく荒れ狂う。ベテランの船長や機関長は「全くおかしい。こんな事は今までかつてない。また、航海関係の本にも書いてない」と話す。そのうち、船員の間から妙な噂がもち上がった。「船が進まないのは沖縄戦で散った英霊達が我々の船が南方最後の復員船であるゆえ、羨やましがって引っ張っているんだ」と言う。最初は迷信だと信用しなかったが、次第に皆が信じだし上層部を動かして盛大な慰霊祭を催すことに決まった。その日が来た。全員服装を整え、甲板や舷側通路等に整列。正午を期して、もの悲しいサイレンの吹鳴が長々と尾を引いて会場に響き渡り、海底へと吸い込まれて行くかのようである。我々全員静かに黙とう。隊員の僧侶達による朗々たる中にも哀愁を帯びたねんごろな読経が流れ渡るなか「お国のために散った英霊達よ、さぞ苦しかったろう。親や妻子のいる故郷へ帰りたかったろう。同じ軍隊仲間としてその気持ちは痛いほどよくわかります。我々だけ帰国することは誠に心苦しく思います。どうか安らかに成仏して下さい」との祈りを込め、指揮官が海上へ花束を献げた。ゆらゆらと漂う花が波間にスーッと消えて行く。続いて「腹一杯食べろよ」と声かけながら、握り飯や菓子等を献投。その一瞬、船の周りの海がざわざわし始めた。花を抱き、握り飯をほうばり、手を振っている幾多の英霊の幻が海の彼方へと消えて行ってしまったような気がした。荘厳な雰囲気の中、肅然と丁重に執り行われ、式が済むと胸の障えが取れ、ほっとした気分になった。しばらくすると風も静まり、夕方頃には嘘のようにすっかり止んでしまった。「全く不思議だ」と皆、あっけにとられながらも喜び合った。それにしても船員達の話は本当であったなあと、今でも不思議でたまらない。後は一路平安快晴の東シナ海を快調にとばした。甲板ではあちこち談笑のグループで賑わい、船室ものんびり雑談。嬉しそうな皆の笑顔がこぼれている。まさに春風駘蕩。ほどなくして船は南風崎の湾内に入った。久しぶりに眺める内地の山々、小雨に濡れるのも構わず全員甲板へ出て喰い入るように眺めた。一同肅然として声なく、万感胸に迫り唯々見つめるだけであった。停泊していた商船学

校の練習船の横を通り過ぎるとき、生徒達が一齐に手を振って歓迎。「お帰りなさい」「ご苦労様でした」の連呼に、全員、涙滂沱。手を振り合い、叫び合い、まさに感激の応酬である。しぼらしくて静かに停船。実にシンガポール出港以来34日という通常の約3倍の日数を輝山丸と共に過ごした長い航海がやっと終わり、夢にまでに見た懐かしい内地へ辿り着いた。「輝山丸君、御苦労様、ありがとう」と感謝しつつ船を見上げた。様々の事柄が走馬灯のように巡り、いつしか熱い涙がほろり……。